

2017
おもろ
チャレンジ

Modern Ruins と Urbex(urban explanation)の関連

経済学部 2年

中本 琢仁

アイルランド、英国

2018年3月1日-

2018年3月25日



渡航概要と内容

当初の予定と異なり、現地で Care of ruins の人々とコンタクトを取ることができなかつた。これは、Historic England においてこの部署そのものが解体されたからである。ここで渡航の目的を少々変更し、Modern Ruins に関する調査と並行して urbex 文化に焦点を合わせることにした。(Urbex とは urban explanation の略語であり、日本の所謂「廃墟趣味」に該当する言葉である。) 準備段階で現地の探索者やネットの情報を利用して、訪れる廃墟はすべて選定しており、渡航中はその通りに各地を回った。

以下、苦労したこと、トラブルについて記載する。まず、日本ほど廃墟情報のアップデートが頻繁でないようで、訪れた場所のいくつかが解体中もしくは解体済みであった。廃墟の寿命を考えるうえでは良いデータであるが、ネット情報の信頼性は疑問であった。一応出発前に Google map を用いて衛星写真での確認を行うが解体中か判別しにくい場合も多く、また、衛星写真も新しいものとは限らない。こればかりは行って確かめるほかなかった。イギリスの Southampton の廃墟において、麻薬の中毒者を見つけた。麻薬の規制が日本と比べて緩いこともあってか、しばしば出くわすことがあるようだ。当然探索は諦め、即座に逃げた。アイルランドの田舎町を訪れた時は英語で苦労した。独特の訛りでほとんど聞き取ることができなかったためである。これは google 翻訳アプリに頼った。ロンドンでは東洋人であることもあってかホームレスなどから乞食にあうことが多かった。ヨーロッパのホームレスはアクティブである。英語の良い経験になった。金銭は一度も払わなかった。

渡航を通じて感じたこと・学んだこと

廃墟に対する定義として仮に、一年以上、メンテナンスが行われていない建造物、とする。ま

ず、現代における廃墟の成立要件についてまとめる。廃墟化はいくつかの条件を前提とする。第一に経済的な条件である。土地、建造物に再利用の採算がとれない場合、廃墟化が起こる。これは土地の価値と解体や再利用のコストと対応する。土地としては好条件の Battersea power station の再開発計画が何度も頓挫したのは、その規模によるところが大きい。第二に立地的な条件である。解体の難易度が廃墟化につながる。重機の入りにくい山間に作られたものは放棄されることが多く、またイギリス、Whitstable の Maunsell Forts や日本の軍艦島など海上に作られた建造物も放棄されやすい。第三に特殊条件である。チェルノブイリや福島原発事故の例にみられるような放射線による汚染や、戦争などで放棄された場所は大規模な廃墟化が起こる。政府など公的機関から立ち入りを禁じられる例も多い。上記の条件から廃墟化は遠郊部の比較的規模が大きい建造物に起こりやすい。廃墟の寿命という概念も考えられる。廃墟化したのちに、倒壊、もしくは解体、再利用にかかるまでの期間を指すとする。これは都市中心地からの距離、また気候や建材などに左右されるが、うまく測ることができればその地域の発達度のひとつの指標になりうるのではないだろうか。

Urbex について軽く触れる。近年目にするようになった廃墟趣味であるが、これはインターネットの普及が前提にある。衛星写真や実際に行った人間の情報がなければたどり着くことは至難である。近年の廃墟ブームの要因の一つは、探索するための環境が整った、あるいはそのハードルが下がったことにあるといえるだろう。探索者の危機管理意識や、その行為自体の法律に関する問題が取り沙汰されることも多い一方で、放棄された場所の美しさの発見につながることも確かであり、実際彼らが撮った写真や動画が新たな観光資源を生み出すこともある。軍艦島の例は特に顕著だ。もちろん Urbex は様々なことへの配慮が必須であると考えられるが、個人としては Urbex を無暗に制限するのではなく、その活動が生み出すものに着目してほしいと願っている。

Modern Ruins の再開発を、Battersea power station を例にとって簡単に考察したい。2基の発電所からなるこの場所は、1983年には運転を終了し、廃墟化した。その後3度の再開発計画の頓挫の後、現在の発電所一帯を商店、レジャー施設として、さらに発電所自体を居住地化する計画がはじまった。Listed Buildings of United Kingdom のグレードII指定（指定文化財）により、そのまま景観を残しながらの再開発が進められている。着目すべきは景観を維持したまま内部を居住地化したことである。余談であるがアップルのイギリス本社もこの場所への移転を決定している。このように規模の大きい廃墟は往々にして資金繰りの問題で計画が頓挫しやすい。この発電所はロンドン中心地から非常に近い好立地であ



ったのにも関わらず、なかなか開発が進まなかった。空間の有効活用のためにも補助金を拠出することも一考の余地があると思う。

この渡航における一番の収穫は、人生で最も美しいと思える廃墟に出会えたことだ。発見したときは、最上の喜びであった。自分の中の廃墟美は建造物と植物の調和にあるのだと実感した。廃墟の湿った空気感、空間の薄暗さ、差し込む光、グラフィティと苔、風化による残骸、すばらしい塩梅だった。

日本や台湾などアジア地域に多い系統の廃墟であったが、水車小屋という水気の多い立地上、このような倒壊具合になったのだと考える。



■ 今回の経験をどのように今後生かしていくか

まず海外渡航が初めてだったので、英語とコミュニケーションの良い勉強になった。これからは気楽に海外の廃墟に足を運べるだろう。その際には現地の探索者と連絡を取って、しっかりと情報の裏付けをしたい。興味の上では、先に軽く触れた廃墟の寿命に関して調べてみたいと考えている。

■ 今後本プログラムを希望する学生へのアドバイス

準備段階の情報収集においては、なるべく現地の人に連絡をとって直接、その場の情報を聞くことをお勧めしたい。

■ 主な奨学金の使途

- *渡航費
- *宿泊費
- *食費・生活費
- *移動費
- *海外旅行保険・通信費 など

